

# 戦死者よ、個人に帰れ

——夏目漱石「趣味の遺伝」よ The View of the World——

馬場 美佳

はじめに

ある近代的研究者の誕生よ The View of the World

漱石の作品を読む際、つい忘れがちになってしまふことは、彼が近代における人文系学問に従事したもつとも初期の研究者のひとりだということである。それは高等教育機関との関わりを持ったという以上に、根本的な人文系学問の変容を経験したという意味で

だ。漱石こと夏目金之助は、明治三三（一九〇〇）年、官命を帯びて他動的にイギリスへ留学したが、そこで彼は従来の東洋的な学者とは異なる志向と態度をもつ研究者に変貌する。そのプロセスは『文学論』（明治四〇）「序」に詳しい。留学直後の彼は語学の上達を目指しつつ「文学の研究に従事」しようとしていた。だがその「方法」と「部門」とを決定し得ず、ひとまず大学の講義や個人教師に頼るが、期待するものは得られなかった。続いて「英文学に関する書籍を手に入れて読破」しようとして一年あまりが経過したとき、この「検束なき読書法」が結果、彼をして「茫然と自失させる」ことになる。それは、「漢学」における「文学」を理解するのに成功した「読書法」のはずだった。「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々

裏に左国史漢より得たり」という実感が短期間でもたらされた東洋的な学問の方法が、英文学にはまったく通じなかったのだ。そして、「倫敦の孤燈の下」ついに「漢学に所謂文学と、英語に所謂文学とは、到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のもの」という認識を得、ここにはじめて「根本的に文学とは如何なるものと云へる問題を解釈せんと決心」する。こうして、問題の在処を自覚し、その分析にふさわしい方法を見出し、目的をもつて研究対象に向かう近代的な身振りをもつ研究者が誕生した。

彼の研究の目的は、「心理的」「社会的」という観点から「文学」を「解釈」することに定められた。そこに注がれた情熱は、「問題が頗る大にして且つ新しきが故」に、「尤も鋭意に最も誠実に研究を持続」させた。問題解決のための目的を持った読書は「蠅頭の細字にして五六寸の高さ」にもなる『ノート』になったという。以上の『文学論』「序」の叙述は、留学中の書簡（中根重一宛、明治三五年三月一五日付）を読む限り、実際に近い体験を率直に記しているものと思われる。

私も当地着後（去年八九月頃より）（留学開始から約一年後を指す…引用者注）より「著述を思ひ立ち、目下、日夜読書とノートをとると自己の考を少し宛かくのとを商売に致候。同じ書

を著はすなら西洋人の糟粕では詰らない、人に見せても一通はづかしからぬ者をと存じ励精致居候〔中略〕小生の考にては「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め、夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り、夫より人生の意義目的及び其活力の变化を論じ、次に開化の如何なる者なるやを論じ、開化を構成する諸原素を解剖し、其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候

〔傍線は引用者による。以下同〕

同じ読書でも、「ノートをとりつつ、「自己の考を少し宛かく」ことができたのは、問題意識が明確になったからであろう。書簡の続きには、自らの課題設定について、「大きな事故、哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候故、自分ながら其大胆なるにあきれ候」とあり、オリジナルのテーマを発見したひとりの研究者の嬉々とした姿が目には浮かぶ。「ノート」を調査した岡三郎が、そこに「神経衰弱とは無縁」な「精神の高揚が端的に表現」されているというのも首肯できる。また、「引用の正確さ」ともより、多様な情報からなるノートの整合性は「見事なもの」であり、「さらに当代一流の著者たちの論説についても、言説の根拠や細部にわたって（余云フ）という形式で機敏に批判的修正や独自の見解が記されている」といふ。必要とする情報を収集・選択し、批評的に判断する研究主体が確かに生成している。

先に引用した書簡の二つ目の傍線部に、研究すべき最初の課題としてあげられている「世界を如何に観るべきや」とは、「ノート」の内「The View of the World」（「世界観」三枚四頁）で検討され

ているものだ。心理学、文明論といったロンドンで出版されていた当時最新の専門書をはじめ文学作品など多岐にわたる書物を参照し、各書がもつ哲学的思考にアクセスし、ときには鏡としながら、どのような「The View of the World」があるのか、あるいは著者たちが前提にしているかがサンプリングされている。T・リボアの『The Psychology of the Emotions（感情の心理学）』（1897 現代科学叢書）からの「psychological—no subject no object」（心理学的には—主観なければ客観なし）というメモにはじまり、たとえばJ・ミルトン『Paradise Lost（失楽園）』（1667）に「 Milton 曰ク manハ godノ imageナリト」とメモした直後、「余云フ godハ manノ imageナリ」との考えを記すように、「己」こそが「世界」の「観方」を生み出す主体であるということに強い関心を寄せていたことがわかる（この議論は『文学論』「第一編第三章 文学的内容の分類及び其価値的等級」で聖書やミルトンを用いつつ詳細に展開されることになる）。

『ノート』は、帰国後、東京帝国大学における講義「英文学概説」さらに「文学論」に結実し、彼の最初の文学研究の成果となるのだが、その研究の起点となった「The View of the World」という問題が、小説のテーマに深く関わっている作がある。日露戦争終結直後を舞台に、「学問読書を専一にする身分」にある若い学者の一人称という形式によって書かれた「趣味の遺伝」（『帝国文学』明治三十九年一月号）である。以下、「The View of the World」を研究した成果の上に漱石が本作を構想したと考える根拠を、小説の解釈とともに詳述し、それによって見出されたメッセージの終戦直後の社会におけ

る独自性を評価していく。

一 神学的、形而上学的、そして実証的なる思索へ

— A・コント「三段階の法則」にそって

「趣味の遺伝」は、「余」という一人称で語る若い学者の行動にもなつて継起する思索のあとを順番に追うことができるもので、それがフランスの哲学者にして社会学の祖ともされるオーギュスト・コントの著『Cours de Philosophie Positive（実証哲学講義）』（1830,1842）のよう「三段階の法則」と同じ過程を辿っていると考えられる。西洋哲学を受容する上で、明治もはやい時期からその思想は日本において知られ、『ノート』にもコントへの言及は多い。二〇世紀はじめ、コントは西洋哲学においてカントと並びまず検証される対象でもあった。

コントの「三段階の法則」は、フランス革命後の社会において、宗教と形而上学的哲学による思考から脱却し、共同体を再構築することをめざすなかで提唱された。その主張は、人類の思考のすべてが「神学的」「形而上学的」「実証的」の三つの段階を順に通過するというもので、人間知識の歴史的な発展法則として発見・提示された。コントは、近代化する社会が、「実証的」段階へとすみやかに移行する必然を説いた。そして「実証」の目的と意義は、すべての事象をそのあらわれた姿のままに認め、背後にいかなる因果関係もなく、われわれの認識はもっぱらあらわれた現象同士の相関関係の経験を基礎に、未来を「予測」することとした。これにより、現

象の説明原理が「原因」から「法則」へとかわり、知識に関して「真偽」ではなく、ただ「神学的」か「形而上学的」か「実証的」か、だけが問われることになる。さらにその説明の根拠も「想像力」から「観察」へとかわり、「観察」は「理論」なしには有意味には行なわれないものとされた。このようにして唯一絶対の真実といった一元的な「世界観」から免れることができるというものである。「趣味の遺伝」の「余」の思索の展開は、まさに「三段階の法則」そのものになっていると考えられるので、まずはこれについて具体的に示していく。

「趣味の遺伝」は三章構成になっており、「一」は「陽気の所為せいで神も気違になる」という「余」の言葉ではじまる。「神」の「人を屠りて飢えたる犬を救へ」と「雲の裡より叫ぶ声」が響き渡り「日人と露人ははつと応へて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた」。狂った神によって戦場で犬が人を屠るという大殺戮が展開するのである。日露戦争終結直後というデリケートな時期に発表されたこともあり、本作の研究史のはやくから漱石の厭戦思想の強度をはかる部分として注目されてきた。

だが問題は、こうした神のビジョンが、「怖い事だと例の通り空想に耽りながらいつしか新橋へ来た」とあるように、「余」の「空想」だということだろう。「三段階の法則」において、第一の「神学的」段階では観察よりも想像力が支配し、現象を説明するために、それを生み出している人格化された原因、つまり神々あるいは神が持ち出されるという。「余」はこの戦争を神の所業として想像し、日露戦争を「神学的」に解釈してみせるのであり、そこから本作がはじ

まっていることに注意したい。

続いて「余」は凱旋に遭遇する。先頭に將軍が現れると、周囲に万歳の声がある。生まれてこの方万歳をしたことがないという「余」も、今回こそは大声を発しようとするが声がでない。「余」は「何故？」と自問し、即座に次のように言い訳をする。

何故か分かるものか。何故とか此故とか云ふのは事件が過ぎてから冷静な頭脳に復したとき當時を回想して始めて分解し得た智識にすぎん。「中略」予期出来ん咄嗟の働きに分別が出るものなら人間の歴史は無事なものである。余の万歳は余の支配権以外に超然として止まつたと云はねばならぬ。万歳がとまると共に胸の中に名状しがたい波動が込み上げて来て、両眼から二雫ばかり涙が落ちた。

万歳の声のかわりにこぼれた涙の理由について「余」は思索をめぐらせる。戦争を新聞でしか知らなかった自分の目に、出征前とは大きく変貌したのである。「將軍」という生きた「戦争」の「結果の一片」が写ったことで、「此一片に誘はれて満州の大野を敵ふ大戦争の光景がありありと脳裏に描出せられた」とある。これが「万歳と云ふ欢呼の声」に「満州の野に起つた呐喊の反響」を幻聴させ、万歳は万歳の意義でしかないのに対し、呐喊は「意味のない所に大変な深い情が籠つて居る」と考える。「ワー其者が直ちに精神である。霊である。人間である。誠である」として、こうした「人界崇高の感」について、「数十人、数百人、数千数万人の誠を一度に聴き得たる時に、「始めて無上絶大の玄境に入る」とし、將軍に対する「涼しい涙」は「此玄境の反応」だったと結論付けるのである。將軍の

姿に表象された集団の誠にふれてしまった「余」に、もはや万歳はできない。これが「余の支配権以外に超然」としたものの正体であつて、いわば批判的思考の停止をもたらすような涙を流させたものでもあつた。

この思索は、戦場の呐喊という現象の内実が「精神」にあると「形而上学的」に解釈したものと見える。コントの言う第二の「形而上学的」段階とは、第一の「神学的」段階に比して、想像力の支配は減少するが、観察もまだ確立しておらず、現象の背後に原因が存在のかたちで求められるというものである。いわば抽象概念や觀念に原因を求め現象を説明する行為といえる。このように見出した戦争の論理を駆使するようになった「余」は、將軍の後に現れた帰還兵たちの姿の凄まじさを目にしたとき、重ねて「形而上学的」に解釈するのである。

いづれもあらん限りの髻を生やして、出来る丈色を黒くして居る。是等も戦争の片破れである。大和魂を鑄固めた製作品である。「中略」只髻茫々として、むさくるしき事乞食を去る遠からざる紀念物のみはなくて叶はぬ。彼等は日本の精神を代表するのみならず、広く人類一般の精神を代表して居る。人類の精神は算盤で弾けず、三味線に乗らず、三頁にも書けず、百科全書中にも見当らぬ。只此兵士等の色の黒い、みすばらしい所に髻髻として揺曳して居る。

將軍のときに続き「余」は兵士たちを「戦争の片破れ」とみなし、「大和魂」「日本の精神」「人類の精神」として解釈している。しかも「余」の場合、国家がさらに一般化・抽象化され人類にとつての戦争とし

てとらえられているのである。

こうして「余」は、戦争の論理で思索するのだが、最後に目にした帰還兵の軍曹と、一年余りも前に志願兵として旅順で亡くなった親友の河上浩一（浩さん）とが兄弟と見紛うばかりに似ており、出迎えた老母が軍曹にしがみつく姿に、亡友と残された母親とを生々しく思い出してしまふ。（作中「新橋事件」と呼ばれている）。ゆえに次章「二」では、亡友のことを思い、弔わねばならぬと久しぶりに墓参りに出かけるが、そこで先に手を合わせる見知らぬ女に遭遇する「寂光院事件」が起る。最終章「三」ではこの謎の女のこと気がかり、亡友の従軍中の日記を母親から借り出し、そこに一目会って以来夢にまで見ると記されていた郵便局の女と寂光院の女が同じ人物ではないかと思ひ始める。あまりに非現実的な事件の「真相」を極めて、「全体の成行」を「明瞭」にしたくなる。

この謎が気にかかるあまり、学校の講義にも身が入らなくなり、すこし落ち着いて「探究」せねばならぬと反省し、謎から距離を置いて、自身の最近の研究テーマである「遺伝」に関する読書をはじめたところ、突如、謎を「遺伝」で説明できないかと思いつくのである。

当人から聞き得る事実其物が不思議である以上は余の疑惑は落ち付き様がない。昔はこんな現象を因果と称へて居た。因果は諦める者、泣く子と地頭には勝たれぬ者と相場が極つて居た。成程因果と言ひ放てば因果で済むかも知れない。然し二十世紀の文明は此因を極めなければ承知しない。しかもこんな芝居的夢幻的現象の因を極めるのは遺伝によるより外に仕様はなから

うと思ふ。

「芝居的無限的現象の因」を極めるための方法として「遺伝」という概念を用い、「趣味」もまた「遺伝」という「理論」によって仮説する<sup>4</sup>。そして亡友と寂光院の女（小野田のお嬢さん）の先祖に詳しい者に話を聞き、実は二人の先祖が想いあつても結ばれなかったという過去を引き出し、先祖の想いが遺伝し、子孫が惹かれあつたという「趣味の遺伝と云ふ理論」を検証・証明することができたと結論するのである。

現象を観察し、仮説し、検証して、そこに横たわる法則を発見すること。そのことをもって哲学の第一としたのがコントが第三段階として主張した「実証的」段階であり、実証哲学と呼んだものである。観察した事実の秩序付けという科学の態度に留まり、社会の諸現象について研究する。先に引用した部分の「余」の関心を見る限り、「因果」の「因」が中心になっていることもポイントになる。つまり事実の観察と仮説および理論化という実証的な態度によって（それは個人的な好奇心を満たすだけの「下品」なものではなく、学究を目的とした「高尚」なものとなり）、「芝居的無限的現象の因」そのものが研究対象となり、「趣味の遺伝と云ふ理論」による秩序付けという法則化によって解釈された「世界」になっているといえる。

以上のように本作では、コントによって人間知識の発展法則として示されていた三つの世界解釈の方法が、一人の人間の頭のなかで展開している。続いてこのことの意味を論じるべきだが、その前に、「余」のいう「趣味の遺伝と云ふ理論」が、そもどのようなものとして位置づけられるのか見ておく必要がある。これは「趣味の遺伝

といふ此神秘的な物語も、別に不思議とも思はないで、浮か浮かと思ひて仕舞ふ<sup>5)</sup>と感じられる理由を考えることもつながるはずである。

## 二 「世界」は「仮説」でできている

### ―研究のための読書行為とC・リードの意味

本作に関する研究において、「余」が持ち得た知識や同時代の遺伝学説の日本への紹介時期が勘案されながら、「趣味の遺伝と云ふ理論」の真偽が検討されてきたといえる。だがこれは、総じて「余」の信頼度を下げ、その批評眼を疑わしいものとみなす論の傾向を生んできた。一方、男女が生まれる前から惹かれあうというロマンチックで神秘的な出来事を描くことに漱石の関心があっただけで、遺伝そのものに意味はないという見方もある。だがこれだと、途中に複数挟まれる思索は水を差しているだけになりそうである。

そこで、前節で分析したように「世界観」を問題にした小説という観点から改めて読んでみることにしたい。そうすると、ただでさえ探求が始まったばかりの若い研究領域であった遺伝において、「趣味」が「遺伝」という考えの真偽がグレイゾーンにあることこそが気にかかる。一九〇〇（明治三三）年、数十年埋もれていたメンデルの遺伝の法則が再発見され、隔世遺伝という現象が起きる仕組みも説明されるようになっていたが、何が遺伝するかの全貌はいまだ見えていなかった（遺伝情報の問題は、現代でも未知数だが）。すくなくとも「趣味の遺伝」が書かれた段階では、何が遺伝するの

かは未来に持ち越されてしかるべき問題だったということだ。そこで真偽ではなく、「余」が「実証的」な謎の解決方法として「遺伝」を見出すプロセスそのものに焦点をあててみたい。

「余」は、亡友と寂光院の女の関係を明らかにする方法がなかなか見つからず窮してしまい、気分を変えて「先達中からの取調物を引き続いてやる事」にする。「近頃余の調べて居る事項は遺伝と云ふ大問題である」といい、「メンデルリズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘッケルの議論だの、其弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スベンサーの進化心理説だのと色々な人が色々な事を云ふて居る」と生物学者や社会進化論者の名を列挙するが、実際に手にして読み、「寂光院事件」以来の謎を「遺伝」で解決するというインスピレーションを得るきっかけになっているのは「近頃出版になった英吉利のリードと云ふ人の著述」である。だがこれは実は遺伝学でも進化論の本でもない。それもあつてか先行論で言及されたことはないに等しい。リードについて「漱石全集」第二巻（平成六・一 岩波書店）の注（松村昌家担当）には「Read, Carveth (1848-1931) イギリスの哲学者。経験主義的認識論に立ちつつ、汎心論的世界観をいなく」とある。なぜ遺伝の研究をしている「余」がこのリードの本を読んでいるのか。「余」が遺伝学を科学者のように実践するということを示したいならば、列挙した遺伝論者たちだけで十分である。「元来余は医者でもない、生物学者でもない。だから遺伝と云ふ問題に関して専門上の智識は無論有して居らぬ」と断言しており、「好奇心が挑発」されているのは「其起原発達の歴史やら最近の新説やらを一通り承知したいという希望」ゆえである。つまり、「余」は

遺伝の学説とともに、遺伝がもたらす「世界観」に興味関心があり、その学究ために読書をしているといえる。

しかし「余」の読書シーンのポイントは、リードの著述が、ほとんど読まれていないことだろう。というのも謎にとらわれたまま本を読もうとすると、目の前に亡友の日記や寂光院の女などの「狂言」が次々と現れる。それでも読み続けると「此狂言と本文の間が次第に接近してくる。仕舞にはどこからが狂言でどこ迄が本文か分からない様にぼうつとして」しまう。この状態を「五六分」続けたところ「忽ち頭の中に電流を通じた感じ」がし、「さうだ、此の問題は遺伝で解ける問題だ。遺伝で解けば吃度解ける」という確信が突如として芽生えるのである。つまり、「余」の読書行為は、頭の中にある別々のふたつの関心が結びつき解決の糸口を見つける契機となる、いかにも研究者らしいものといえる。

漱石は作中人物に読書させるという趣向を、人物造形の方法としてよく用いる。知られているものに「三四郎」（明治四一）で主人公の大学生に読ませているペーコンがあるが、注目したいのは、「趣味の遺伝」執筆直後、森田草平の短篇小説「病葉」について、主人公に難しい本を読ませていることに辛辣な批評を加えつつ、読書という趣向が果たす役割を明確に記していることである。

主人公が何だか六づかしい本を読んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを読むと。故意にあんな本を読ませて居る様な、初心な気障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを読むべき傾向を有して居るか、又はあの

本がああ短篇中に一種の関係を有して居るなら故意とは思

れなかつたらう。尤も後段に一寸関係が出るがあれ丈では、あんな本をよまず必用はないと思ふ

（森田草平宛書簡、明治三十九年一月七日付）

漱石にとつて、小説における読書の趣向とは、「主人公が一種の人物」で「読むべき傾向を有して居る」という人物由来の必然性かあるいは「短篇中に一種の関係を有して居る」といったプロットの必然性が問われるものであった。「趣味の遺伝」の「余」は若い学者という「一種の人物」であり、その実践が、漱石自身が留学中に獲得した研究のための読書法とつながっているのだとすれば、ますます重要な意味を持つはずである。また、ここでの読書シーンは、問題解決のための近代的研究者による読書行為を意味し、読書を「遺伝」という研究テーマに集中して行っていた「余」が、亡友と女の謎を、同じ観点からまなざす契機となるので、「短篇中に一種の関係を有して居る」ものでもある。作中にリードに関する情報が全くないことからすると、読書に集中しようとする行為が、無意識に作用し、思わぬ発想やひらめきをもたらすさまが重要なだろう。ゆえに、極論すれば、ここで「余」が読む本はリードでなくても構わないことになる。

だが、研究のための読書を扱っているからこそ、逆にリードの名前が示された事実も見過ごせない。作中に情報がないのは、本作が『帝国文学』に掲載されたために許容される情報の高度さだろうか。だとしたら、ますますそこに何らかの主張がこめられている可能性を一度考えてみてもよいだろう。

漱石が「趣味の遺伝」を執筆していた頃、リードはロンドン大学

の心理学・論理学担当の教授であった。明治二〇年代、イギリスの連合心理学が受容されたとき、もともと日本の心理学教科書として採用されたJ・サリーが、ロンドン大学の自らの後任として呼んだのがリードである。時期的に見て、漱石はリードとは直接面識はなかっただろう。だが『ノート』にサリーが頻出することから、帰国後、ロンドン大学に着任したリードにも注目していた可能性は高い。以下、ロンドン大学でリードの後を襲ったC・スピアマンによる追悼文『THE LIFE-WORK OF CARVETH READ, 1848-1931』(『British Journal of Psychology』Vol.23, 1932-7)より、その業績を紹介してみたい。

リードはケンブリッジ大学を優秀な成績で卒業し、さらにライプニッツ、ハイデルベルクで学び、レンの教育機関で論理学・認識論・存在論・倫理学・経済学・心理学を教えていた。一九〇三(明治三六)年、サリーの後任として『Psychology of Mind and Logic』の教授としてロンドン大学に着任し、一九一(同四四)年までつとめ、その後も一九二(大正一〇)年まで大学で『Comparative Psychology』の講義を続けたとさう。

リードの著作は『Theory in Logic』(1878)・『The Metaphysics of Nature』(1905)・『Natural and Social Morals』(1909)・『The Origin of Man and of His Superstitions』(1920)の全四冊。追悼文自体が心理学雑誌に掲載されているので、リードの心理学者としての業績を紹介しようとしているのだが、タイトルからもわかるとおり、四冊ともに心理学色が薄いということがスピアマンの文章からも如実に伝わってくる。ましてや遺伝を重視した研究書でもない。とな

ると、前任のサリーがロンドン大学に実験心理学教室を開いた実験系であったのに対し、リードは実験をせず、どちらかというと哲学的考察(と論理学)を専門としていたことが示唆的だ。

「趣味の遺伝」で「余」が手にしているのは、刊行時期から推して、リードが大学に着任して最初に刊行した『The Metaphysics of Nature (自然の形而上学)』となるだろう。この本は、リードが自己の思想を表明したのとしてももっとも成功した著述だとい<sup>7)</sup>う。「Nature」とはいわゆる政治や宗教といった人間がつくりだした観念以外を扱うことを意味したもので、『Metaphysics』とは「knowledge (知)とbelief (信)の正当性と適切性の研究」の謂<sup>8)</sup>だ<sup>9)</sup>とある。

本書の観点の特徴は以下のようなものである。「物質主義も心霊主義も真実主義であって、知覚についても意志作用についてもなんら解決にならず、物質と精神とに実質を分けてつなかりを断つてしま<sup>10)</sup>う。ゆえに、一貫した筋の通った説明を可能にするために以下のように仮説する」とい<sup>11)</sup>う。

... this hypothesis that the World is essentially a conscious thing: that in conscious we have immediate knowledge of Reality, but not of the whole of Being: that the rest of Being is made known to us by phenomena: that it is everywhere conscious, but in various degree are known to us by the phenomena of organization

リードは、「『世界』は本質的に意識されたものである」とし、そこで重要なのが「知覚」や「意志作用」による「immediate



「knowledge of Reality」(「現実」の直接的な知)であるといひ、「実在」や「現象」についても「意識」との関係において解釈する。「余」が読んでいる冒頭の数ページは「序」に相当するといえるが、これは「Belief and Knowledge」と「Reality and Truth」の全二章から成る。その中には、Reality (現実) からすれば、Belief (信) も Knowledge (知) も Science (科学) も相互に補充しあう関係にある形而上的なものであり、あくまでも Reality を主観的に受容し意識化するプロセスに関与し、事実かどうかの問題ではないと書かれてある。漱石もまた『文学論』にみられるように「意識」の役割をもとに文学を研究していた時期である。また『ノート』「大要」(二枚二頁)は研究書の構想メモと言われているものだが、その「1」として「The view of the world」が立項され、「No objective existence except phenomena」(現象以外に客観的存在はなからず)、「Anything which is not phenomena is either hypothesis or dogmatic assumption or an ideal」(現象ではないものとは、仮説や教義上の仮定や観念である)と記していた。哲学・心理学と文学の違いはあれど、研究の方向性がリードと同じだった可能性が高い。リードが「余」の読む本として選ばれた意味も納得できるのである。

そも本作で「遺伝」に関する「理論」が問題になっていることから、『ノート』「The view of the world」における A・ワイスマン『Gem-Plasm: A Theory of Heredity (生殖細胞質・遺伝の理論)』(1893 現代科学叢書)の「序」に関するメモに思い当たる。まずワイスマンの「序」とは、遺伝という科学の若さを十分承知している

がゆえに、だからこそ仮説として理論を提示し、未来に投機すると訴えるものであった。遺伝の理論とはそうした未知の可能性を含んだ上での「仮説」として提示され得る、科学の論理的推論の原則をもっとも必要とする研究だったのである。そしてワイスマンが「偽りの原則が受け入れられる」ということは、すべての現象がそれによって説明され、事象はもはや疑いものになる」と懸念を示す部分に対し、漱石は『ノート』に「metaphysicians no assumption is nari」(形而上学者の仮説はこれである)と、より大きなロジックの問題として取り上げ、次のように自身の見解を記していた。

余云。change ヲ assume スレバ change ニテ何事モトケ absolute ヲ assume スレバ absolute ニテ何事モトケル、若キ恋人ヨリ見レバ宇宙ハ恋ナリ、鳥ノ声モ恋ナリ、鹿ノ声モ恋ナリ、花モ月モ恋ナラスハナシ。コハ何故ト問フ迄モナシ、宇宙ハ即チ已ニシテ、已トハ即チ宇宙ナレバナリ。已ヲ project スルガ故ナリ。宇宙赤キハ己レノ赤キナリ。宇宙狭キハ己レノ狭キナリ

「宇宙」とは「已」ヲ project (投影)したものだといふ。自己の主観がそのように観たいものとして観るものが「宇宙」すなわち「世界」にして「現実」である。ワイスマンが懸念した科学の問題は、漱石にとって「世界観」の形成に深くかわる形而上的様相を呈す。そして主観や意識を根本に据えたとき、「世界」は「現象」に対する「仮説」によって認識されるものとなる。

学説としてはグレーゾーンにあった遺伝とは、「仮説」がひとつの「世界」としての「現実」を創造するという、この時期の漱石が

獲得していた考えを象徴させるものだったといえる。つまり「余」は、不可思議な「現象」に対し「浩さん」と女を結びつきたいという欲求を「投影」させ、それを「趣味の遺伝と云ふ理論」という「実証的」な論理的推論の手続きにより、自身にとつてのひとつの「現実」としてみせたのである。本作の説得力は、真偽を問う真実主義ではなく、「世界観」とは何かという問題意識に由来しているといえるだろう。

### 三 「情緒」と「情性」の力に導かれて―「余」の成長物語

ここまで「余」の「世界観」を中心に考察してきた。そこで改めてこうした問題が主人公である「余」の一人称で書かれ、さらには三つの章に分けられ、章ごとに見ても場面転換も扱っている要素も多く、かなり綿密に組み立てられたプロットになっていることの意味を探っていききたい。

「一」は、すでにみてきたように「余」の戦争に対する「神学的」知識による解釈が展開しているが、これは戦争に関与していないからできる「空想」ともいえる。『ノート』[Religion]（七枚七頁）に「Conteノ説参考」としつつ、「Godハintellectヲsatisfyスルタメノ仮定ナリ」とあるところからもこの「神学的」な解釈が「余」の知的満足として描かれていると言えるだろう。だからこそ、凱旋当日だと気づいたとたん歓迎の人々に対し、「戦争を狂神の所為の様に考へたり、軍人を犬に食はれに戦地へ行く様に想像したのが急に気の毒になつて来た」と後ろめたくなり、駅へと抜けるために群

集のいない真ん中をきまり悪げに通るときも、「犬に喰ひ残された者の家族と聞いたら定めし怒る事であらう」と内心恐々としてしまふのだ。

だが停車場に着き、凱旋がはじまると、「余」に変化が起きる。まず將軍があらわれ、周囲の万歳の声に戦場の呐喊を連想し、その戦場のイメージが生々しく脳裏に描きだされてしまう。少なくともこの日に万歳ができなかったのは、厭戦や反戦思想のためではない。戦争という現実の生々しい衝撃を感じ取ってしまったゆえである。その衝撃を確認するかのごとく、去ってしまった將軍を再び見ようと「高飛び」しようとするのだが、「滑稽とか真面目とか云ふのは相手と場合によつて変化する事で、高飛び其物が滑稽とは理由のない言草である」という持論を語り出す。いわば、「高飛び」という現象を、どのように観るか、すなわち解釈するかは、「高飛び」そのものとは何ら関係がないということなのだが、注意したいのは、観方を構成する要素が「相手と場合」となっていることだ。つまり「余」は見られる客体になってしまっている。「高飛び」をして一瞬間將軍をみることに成功した「余」は、「茫然として地に下りた」とあるが、ここでの「茫然」状態は、將軍がもたらした「世界観」、すなわち戦争の論理に完全に侵された事態を意味する。このあと、兵士たちの登場の番になるのだが、そこで「余」は彼らを戦争の論理のままに「大和魂」としか見れなくなってしまう。そして亡友に似た軍曹とその老いた母親の再会を目にし感動する一方で、「此軍曹が浩さんの代りに旅順で戦死して浩さんが此軍曹の代りに無事で還つて来たなら嘸結構であらう。御母さんも定めし喜ば

れるであらう」と「勝手な事を考へ」る。大事な人を亡くした悲しみやくやしがあるとしても、軍曹と亡友を代替可能に思えてしまふところもまた、個ではなく数百数千という単位で人間をとらえる戦争の論理に侵されている危うさを感じさせる。こうして「余」は「浩さんの事を思い出して悵然」とするしかないのである。以上、「二」では、終戦を象徴する凱旋を扱いながら、むしろ逆に「余」の「世界観」が戦争の論理に侵されていく事態が報告されている。

「二」は、前半と後半とで対になっている。「黒」と「白」の世界の対比といってもよいだろう。まず前半だが、冒頭で、「余」は、「浩さん！」と亡友に届かぬ声をあげながら、その生前の姿を描き出す。場所は旅順、時は一年前の一月二六日、「浩さん」が戦死した「松樹山の突撃」が開始される「午後一時」だ。これは第三回旅順総攻撃であり、敵軍の要塞化がますます進んだ松樹山堡壘に正面攻撃し凄惨な犠牲を出した作戦である。「黒い日」を吹き落とさんばかりの「野分」が吹いている。味方の大砲の合図で散兵壕から「幾百か知らぬ」兵士が飛び出す。敵の弾丸も相まって「烟」が覆い、「浩さん」の姿は「黒い者」とひと塊りになって「蠢めいて居るもの」でしかない。「余」は、亡友が本来「大きな男」「立派な男」「偉大な男」だと褒め称える。たしかにその人物像は魅力的だ。「浩さん」の興に乗った話をきくと、誰もが夢中になり、「自分の事も忘れて浩さん丈になつて仕舞ふ」ほどに聞き惚れるという。そして「どこへ出しても浩さんなら大丈夫人の目に着くに極つて居る」と信じていた。だが、やはり想像が戦場に戻ると「蠢めいて居る」という「下等な動詞」でしか説明できない。

「余」は弾丸飛び交う激しい戦場では「如何なる人間」「如何なる偉人」も「無意味」に見えてしまうと嘆く。それでも「余」は納得できず、「嗚呼浩さん！一体どこで何をして居るのだ？」と、とうとう「浩さん」が活躍する戦場を想像しはじめる。その虚構の方向性はみやすい。「多人数」のなかでも「もし一人でも人の目につくものがあれば浩さんに違ない」というように、戦場で失われた個性を復活させることであり、また「どこへ出しても平生の浩さんらしくなければ気が済まん」というように、「余の浩さん」を見出したという思いである。だが結局は、塹壕のなかに飛び込んだところに、敵の攻撃が山を切り崩し「砂烟」をあげ、「初冬の日蔭を籠め」るところと亡友をも塹壕のなかに「封じ」てしまふ。戦場を舞台に練り広げられた「浩さん」の個性回復劇は、想像の中でさえ「浩さんがしきりに旗を振ったところはよかつたが、壕の底では、ほかの兵士と同じように冷たくなって死んでいたそうだ」と不成功に終わる。戦争の論理に侵された「余」には、「浩さん」の個性を回復させようとして成し得ない。この状態では、母親も慰められず、亡友が残した戦場での日記にも積極的に食指が動かない。ただ、「何等かの手段で親友を弔つてやらねばならん」という思いはつのもり、しかも「文才があれば平生の交際を其儘記述して雑誌にでも投稿するが」とあるように、「余」の望みは「平生」の「浩さん」ありのままを生かすことだとはっきりしている。だが、それができないので、かわりに生前を偲ぶことができる「記念の遺髪」が埋葬された墓へ参りにかけるのである。

「二」の後半は亡友の墓がある寂光院が舞台となる。小春日和の

暖かさに、「軽々とした快い感じ」を抱きながら「広々とした境内」に入るとあり、「余」の気分がだいたいぶ変わってきている。「学者町」のなかの奥、「坊主の生活」のある場所へと入り込む。まず、本堂の「八寸角の樗柱」の「のたくつた草書の聯」をめぐつての王羲之論、さらには墓場の入り口にある化銀杏をめぐつての落葉論が続く。前者は「えらさうで読めない字を見ると余は必ず王羲之にたくなる。王羲之にしないと古い妙な感じが起らない」という議論で、目の前の情報を既知の知識にすりあわせて満足するという解釈の欲求であり、これにより「古い妙」を意識化している。後者の落葉論は、「見て居ると〔葉が…引用者注〕落つるのではない、空中を掃曳して遊んで居る様に思はれる。閑静である」、「動かない大面積の中に一点が動くから一点以外の静かさが理解出来る」といい、「一点」の動きが「自ら定寂」をおび、「他の部分の静粛な有様」をかえつて意識させるという「閑静の感」の最高潮を分析する。これも「世界」の「観方」の問題であり、この余裕のある態度はいわゆる漱石好みの俳味ひいては低徊趣味に合致している部分でもあろう。「化銀杏の下に立つて、上を見たり下を見たり」することが、戦争の論理に侵されていた「余」が現象を意識化し、「世界」として「観る」ための主観を準備するものでもある。

ひとしきり化銀杏に見入った後、「余」はようやく墓地の中に入り込む。歩くにつれて古い墓の数々が目に入り「先祖代々の墓の中」に「祭り込まれた一人」、つまり「古る仏」なかの「新仏」として「浩さん」をまなざす。塹壕の下に埋まったのではない、墓の下のもうひとりの「浩さん」である。

そして「浩さん」の墓の前で熱心に手を合わせる見知らぬ「若い女」に驚く。女の「白い顔と白いハンケチ」の印象の強さに「あつと思つた瞬間に余の眼には何も映らなかつた」といい、戦争で黒くなつた將軍をみた「高飛び」以来の「茫然」状態になる。とくに二度目に女と「眼と眼が行き合」つたとき、「化銀杏の下」から女が見上げる構図を目にし、そのとたん「余」に希望の光がさす様が、前半で「余」が想像した「松樹山の攻撃」の要素を反転させ、はっきりとしたコントラストを成しながら描かれることに注意したい。まず戦場の「野分」に対し、寂光院は「風なき」状態であり、「時刻は一時か一時半頃」「丁度去年の冬浩さんが大風の中を旗を持つて散兵壕から飛び出した時」とある。戦場では「烟」に覆われていた空が、寂光院では眼に映るほどの雲もなく晴れ渡り「羽があつて飛び登れはどこ迄も飛び登れる」ほどの「無限と云ふ感じ」を醸す。この「無限」の上昇性は、亡友が塹壕から出られない戦場での永遠の下降性とは真逆である。その空には「烟」にかわり「化銀杏の黄金の雲」がある。また戦場では二龍山の敵の「穹窿」（弓形の穴倉）から攻撃の丸が降り注ぎ、「此烟が晴れたら―若し此烟りが散り尽したら」、「浩さんの旗が壕の向側に目を射返して耀き渡つて見えるに違ない」と虚しい願いを抱くしかなかったが、寂光院の屋根瓦は「蒼穹」に對しまさに「暖かき日影を射返して居る」。戦場の想像では「封じ」られたままだった「浩さん」が、穏やかな「世界」へと解放される予兆がここにはある。

そして「余」は、自分のなかに起きたことを説明し始める。「古き空、古き銀杏、古き伽藍と古き墳墓が寂寞として存在する間に、美しく

若い女が立つて居る」という「非常な対照」を感じたとあり、ここに「矛盾」はなく、むしろ「融和」していたとする。この理由は「余」の「情緒」にあった。

余が寂光院の門を潜つて得た情緒は、浮世を歩む年齢が逆行して父母未生前に遡つたと思ふ位、古い、物寂びた、憐れの多い、補へる程確とした痕迹もなき迄、淡く消極的な情緒である。この「情緒」が物寂びた寂光院に「若い女」がいても「矛盾」を起させなかったのであり、「円熟無礙の一種の感動を余の神経に伝へた」。これこそ「余」を変化させたものである。付け加えるなら、これは「古る仏」のなかの「新仏」として「浩さん」をまなざしていた事態とも重なり合っている。そして「淡く消極的」な「情緒」であるゆえに、より意識化し、自らの主観をたよりにつなぎとめなければならぬ。

このあと「余」は、「情緒」がもたらしたものについて「読者」に「学者的に説明」するために長大な議論を展開する。

吾人が事物に対する観察点が従来の経験で支配せらるるの言葉を待たずして明瞭な事実である。経験の勢力は度数と単独な場合を受けた感動の量に因つて高下増減するもの争はれぬ事実であらう（中略）つまるところ吾々の観察点と云ふものは従来の情性で解決せられるのである。

ものを「観る」際、「吾々の観察点と云ふものは従来の情性で解決せられる」という（のちの「遺伝」を観察点にする話への伏線でもある）。この「情性」こそが、「表裏二面」の意味を有する「諷語」の「裏」の意味を、より「深刻で猛烈なもの」として感得するのに

役に立つ。「吾々が使用する大抵の命題は反対の意味に解釈が出来る」のであり、「表裏二面」どちらから「観察」し、どう「解釈」するかについて、「マクベス」の妖婆と門番の関係を例に解説する。冒頭の妖婆に抱く「怖」という「情性」によって「門番の狂言」を見たとき、もはやそれは普通の「滑稽諧謔」とだけは見られなくなっているという効果だ。つまり、「表」で見れば、見知らぬ女が亡友の墓参りをしているというだけである。だが、「余」が寂光院に入ってから形成した「情緒」は「情性」となって「円熟無礙の一種の感動」をもって女をそこにとらえさせた。それは「諷語」でいう「裏」がある可能性を「余」に感得させ、「マクベスの門番が解けたら寂光院の美人も解ける筈だ」と、「深刻で猛烈な」謎となり「解釈」を要請してくるものとなった。

「三」では、「余」が「寂光院の女」という謎をとくための「理論」を発見し、それによる「世界観」を創造するために悪戦苦闘する姿が描かれる。まず、それまでなくさめる方便がなく訪問できずにいた「浩さん」の母親に話を聞きに行く。だがそう簡単には成果は得られない。このとき庭の「白菊」が目に入り、「其時不図思ひ出たのは先日日記の事」とあって、「手懸り」として借り受けるのである。「白菊」は寂光院の女が手向けていた花であると同時に、この章の冒頭で「浩さん」が好きだった花であることが「余」と母親との会話で示されていた。つまりこの「白菊」は、試行錯誤する「余」を最後まで導き、見守る役所を担っているのだから。

「余」の「探究」だが、「浩さん」と女の関係を明らかにすることは、「諷語」でいう「裏」にたどり着かねば意味がないので、直接

確かめるといった安易な方法（「下品」な「探偵的態度」）はとられず、かわりに「浩さん」の戦場での日記を目的をもって調べ始める。「余」は日記の書きぶりについて、「有の儘を有の儘に写して居」り、また「壮士の口吻がない」と喜んで居るが、これは「二」で「余」が目論んだ戦争の論理での「浩さん」の個性回復劇を完全に相対化するものになっている。そしてこの日記に「郵便局で逢つた女の夢」を「三度」も見ているという記述を見出すのである。

前節で分析したように、読書行為を契機に、「遺伝」を使って「仮説」をつくり、謎を解くことを思いつく。「情性」の力はここにも作用しており、「余」はそれまでずっと研究していた「遺伝」によって謎を考え始めるのである。「両人の血統」をどう調べるかといった具体的なプロセスを検討するなかで、「余」の「仮定」が形作られていく。「余」は「浩さん」の代々の話を思い出しながら、両人が紀州の同藩であったのではと第一の「仮定」する。次に「余」の仮定が中るとすると、あとは大抵余の考へ通りに発展して来るに相違ない」として、両人の「先祖の間に何事かあつて、其因果でこんな現象を生じたに違ひない」と第二の「仮定」をする。「探偵」にかわり「仮定」からはじめることで、「学問上の研究の領分」として、自分の好奇心を満足させることができるようになって居る。そしてとうとう藩の家令なる老人の口から実に「余」が「仮定」した通りの、二人の先祖の悲恋物語が明らかになるのである。

こうして「趣味の遺伝と云ふ理論」の証明は「余」のなかで無事に成立する。「実証」の特徴は、あらわれた現象同士の相関関係から発見された「法則」を基に、未来を「予測」することにある。こ

れによって「世界」をまなざす「余」は、「事情を逐一打ち明けて御母さんに相談」という行動にも出る。これは母親と寂光院の女の正体であった小野田のお嬢さんを結びつけた。

最後、「浩さんは塹壕に飛び込んだきり上つて来ない。誰も浩さんを迎に出たものはない」とあるのとは対比的に、「天下に浩さんを思つて居るものは此御母さんと此御嬢さん計り」と報告されるが、戦争の論理による「世界観」に対し、新たな「世界観」の提示でもある。戦死の事実は変えられないが、だとしても、女たちが語り合う「浩一」によってこそ、「余」が親しみ憧れた「浩さん」を生かすことができる。加えて「余」は、「將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す」と言う。すなわち、「一片」や「片割れ」に集約されてしまう「人界崇高の感」の戦争の「世界」よりも、失われた人間の個性を回復し、その人格を愛し尊ぶ「世界」に、より高位の理想を見ているということなのだろう。もちろんこれは「余」が観る「世界」だ。一方には日記のことも白菊のこともなにもかも承知しているような女が観ている「世界」もある。ゆえに末文で、女の兄にあたる工学士について「博士は何も知らぬらしい」とひとこと言及されているのは、本作の「世界観」を如実にあらわしていると考えられる。人それぞれというだけでなく、一個人のなかにも複数の「世界観」はある。だが、そこに「浩一」を想うことが共有される「世界」を創つたのは、「余」の「趣味の遺伝と云ふ理論」だったのである。

「余」が学者として設定されていることの意味は大きい。「二」で「吾々の生活は千差万別であるから、吾々の情性も商売により職業

により、年齢により、気質により、両性によりて各異なる」と解説されているように、学者として常日頃から考えていることや感じていることも含めた「情性」の力が、現象を主観によって解釈しひとつの「世界」を創造する力になっているからだ。最初こそ戦争の論理に侵され、戦死した親友の個性を回復することに失敗した「余」だが、学者としての探究心と知識によって、「浩一」という一個人として愛されるひとつの「世界」あるいは共同体を創造する。「余」こそが、「三段階の法則」になぞらえられながら作中で唯一成長している存在なのである。そう考えれば、「余」の転機として書き込まれる「茫然」状態は、ロンドン留学中に自らの研究テーマに苦悩するかつての夏目金之助が経験したものであったのかもしれない。

#### おわりに 脱戦後の未来—人が個人であるために

明治三八（一九〇五）年の夏に日露戦争は停戦し、八月一日よりポーツマスにて講和会議開始、九月五日休戦議定書調印、同日に日比谷焼き討ち事件が起こり、一〇月十五日に講和条約批准、翌日公布により終戦、そして二月二〇日に大本営が解散する。漱石は一月下旬頃から二月月上旬にかけて「趣味の遺伝」を書いており、まさに戦後という状況に肉薄した作をリアルタイムに創作していたといえよう。

「趣味の遺伝」が掲載された明治三十九年一月の『帝國文学』には、終戦・戦後を意識した著述が並ぶ。戸川秋骨訳・ドーデ著「旗手軍曹」は、普仏戦争の終戦時に軍旗を手放すことに納得できない老兵

を描く。また、片山正雄（孤村）「靈魂と国家」は「日露戦争は終れり。血と鉄との戦は終を告げたり。」と書き起こされ、戦争の勝敗を正義とする道義的解釈を「永遠経験世界（現実界）に実現せられざる理論理想也」と排し、「戦争」という「現象」について「我  
国精神修養の結果」と「仮定」し、「精神とは靈魂也。絶対的自由と独立とを有する靈魂也」という観点から解釈していくのだが、その主張を詳説する前に、次のように記す。

読者は余が議論の少しく独断的なるを怪む可し。然れども余の所説は、余が論述の進行と共に其が証明を得可きが故に、悉くこれが真理なることを仮定して更に余が論ずる所を聴け。

片山の態度は、「趣味の遺伝」で寂光院の女から受けた「感動」について記した「余」が、「斯んな無理を聞かされる読者は定めて承知すまい」と言って「学者的に説明」しはじめる姿や、「仮説」「仮定」から議論をはじめ読者を説得しようとしている姿に重なり、いわば近代的な論文・論述スタイルの定着を感じさせる。片山は結論として、日露戦争において発揮されたものは「哲学、宗教、芸術」を通じて「精神修養」によって培われてきたものだが、戦後の国家が「経済の膨張、科学の発展」のために「唯物論」「肉の力」を優先し、国民の「精神」「靈魂」を減はしかねないと警鐘を鳴らす。そして国民には「心中の賊を破るの法」すなわち「修養と悟道」につとめよと説く。「戦争」を「現象」としてとらえる片山の主張は「趣味の遺伝」と軌を一にしているが、それゆえに漱石の小説の主張の特徴がよく見えてくる。片山は戦後に生きる国民に向けてだが、漱石の場合、戦後に生きる個人に向けてのメッセージになって

いる。戦後においても戦争の論理にとらわれず脱却し得ない人間の「惰性」がある、そこを脱却するためには別の「惰性」によって「世界」を観るまなざしそのものを変えなければならない。戦争の論理は国家の論理であり、個人の論理を取り戻すためには、まずは戦死者こそが、ひとりの人間として個性を回復し、本来の意味での戦争の終わりを迎えないといけない、と。

日露戦争は、最終的に日本軍の死者数が八万四千人にのぼった。とくに陸軍では、日清戦争時の埋葬規則では対応できず、開戦四ヶ月目にして「戦場掃除及戦死者埋葬規則」を新規に制定しなければならなかったという。戦没者の遺髪や遺物、火葬された遺骨を内地へと還送するにしても、遺族への配慮がかなり欠けたものであったことが問題になっていた。なにより、膨大な死者数に対応しきれないという深刻な事態は、戦場に仮葬された戦死者たちをそのまま置き去りにすることを意味した。「趣味の遺伝」が書かれてほとんどなく、明治三十九年二月には、定めであった陸軍埋葬地における戦没者の個人墓標の建設が、その数の異様さと予算の問題から合葬へと変更される。結果、合葬された戦死者たちの氏名は石碑から判明しないことになった<sup>(1)</sup>。この国家の判断は、戦争の論理のままに、戦後も死者をまなざしている証左であろう。フランス革命後、半世紀たつても続く政治的混乱のために共同体が解体したことに危機感を抱いたコントは、実証哲学の主張の先に、生前偉大だった死者を敬い、彼らとともに生きる人類教を唱えた。「趣味の遺伝」もまた、戦争が終わってもなお、戦争による世界解釈が席卷する事態を恐れ、個人をまなざした「世界観」を提示し、早々に戦争の論理から脱却す

るよう説く。日露戦争は、近代国家の国民としてひとりひとりがそれを内面化した瞬間に、個人という近代的理念を踏みこじるものであった。ゆえに「実証的」な世界解釈によって得られた「趣味の遺伝」と云ふ理論は、日露戦争のはじまりから生じていた戦死者と遺族の現状を見据えつつ、これから実現すべき未来を描き出すための「理論」だったともいえる。だが「趣味の遺伝」という作品の鋭敏さは、死しても個人に戻ることが許されない無数の人々の存在が容認されてしまう戦後の現実を、逆説的に予言してしまった。

「浩さん」が戦死した第三回旅順総攻撃から丸九年が経とうとしていた大正三（一九一四）年一月二五日、漱石は学習院輔人会というアカデミックな場において「私の個人主義」という講演を行い、自己と他人の個性の尊重の意義を説いているが、戦争と個人を論じる最後は「趣味の遺伝」と同趣旨になっている。戦争や危急のときには、「考へられる頭の人、考へなくてはゐられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自由を束縛し個人の活動を切り詰めても、国家の為に尽すやうになるのは天然自然と云つてもいい位」とあり、これが「浩さん」が志願兵という設定の所以だとすれば、「私のいふ個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾が必要だと云つて、用もないのに窮屈がる人に対する忠告も含まれてゐると考へて下さい」と戦争が済んだあとの戦争の論理からの脱却を説く漱石は、日露戦後に戦死者が個人に帰ることを強く願った「余」に重なる。とはいえ実際は、この講演の数ヶ月前に欧州大戦が勃発し、漱石が「予測」したような、人間が自然に志向すべき個人が生きる未来は、ますます遠のいていた。―そし



て、この論を擲筆するいまも、戦争の論理は繰り返され、脱戦後の「世界」は遠い未来に置き去りにされたままだと切に思う。

注

(1) 岡三郎『ノート』が語るもの(『漱石全集』第二二卷「月報二七」平成九・六 岩波書店)

(2) 宮永孝「日本に於けるオーギュスト・コント」(『社会志林』平成二二・三)によれば、コントは、明治初年代後半から知られるようになり、その名前が諸文献に現れはじめるという。ここに言及されている多くの文献からは、「三段階の法則」や「人類教」といった思想的特徴、社会学の祖であること、カントとならぶ哲学者であること、スペンサーがコントに影響を受けていたことなどが、基本情報として紹介されていることがわかる。

(3) 「趣味の遺伝」では、万歳と呐喊が、意義と音声の観点から議論されているが、これは凱旋を前にした万歳論争を諷したものと考えられる。明治三八年の『東京朝日新聞』の記事を参照すると、雑報『万歳の元祖争ひ(大学と高師)』(二〇月二二日)、久米邦武投書「万歳の祝声の起りについて」(同三三日)、谷中・台西投書「万歳の成語に就きて」(同二六日)、時事小言「万歳と奉賀」(二月六日)とあり、憲法発布のときに「万歳(バンザイ)」を発明したのは帝大と高等師範のどちらかという議論を皮切りに、漢音か呉音か、語勢はどうか、歓呼の声として適当かどうかが話題になっていた。

(4) 森田草平が「新年の小説」(『芸苑』明治三九・二)で「趣味の遺伝」を評して、冬枯れの墓場に美人が菊の花を供えているのが「趣味」なの

かと書いたことに対し、漱石が「趣味の遺伝といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です」(草平宛書簡、二月二三日付)と教示している。

(5) 注(4)の森田草平評より。草平はまた「こんな自由な叙事の形式は世界無類」とも指摘しているが、この「自由」さは、漱石独自の問題意識を小説化する上で必然だったと考えられる。

(6) 『The Metaphysics of Nature』は、刊行直後、イギリスの學術雑誌に取り上げられていたので、そうした前提も考慮されているかもしれない。管見に入る限り、『The Athenaeum』1905.7、『The Academy』1905.8、『The Speaker』1905.10、『Saturday review of politics, science, and art』1905.10に書評が確認できる。とくに最初の二雑誌は『ノート』をはじめ、各種文章にて漱石が頻繁に参照していた學術雑誌である。

(7) 東北大学附風図書館の現存する漱石文庫リストに、リードの『The Metaphysics of Nature』はなく、次に刊行された『Natural and Social Morals』が確認されるので、前者を読んでいた可能性も高いだろう。後者については、扉に「此書を読んで一〇〇頁位に至り不得已中絶何等得る所なき故なり」とメモされ、意識をめぐる議論で納得のいかに箇所を書き込みが残されている。スピアマンによれば、リードがロンドン大学着任以前の仕事をまとめただけのものだったらしい。

(8) 大岡昇平「漱石と国家意識―『趣味の遺伝』をめぐって―」(『世界昭和四八・一、引用は『小説家夏目漱石』昭和六三・五 筑摩書房より)もこの部分について、「一種の高みから見たような見方」で、「戦争を国家権力のぶつかりあいと見る現実的な立場からすると、少しかつ」とし、書齋にこもる学者という設定のために「呑気な空想にふけ」っている」と指摘している。

(9) 注(8)の大岡もまた、「呑気に空想していた『余』は、ここで「戦争」という「二つの現実に触れた」と解釈している。

(10) 越智治雄『深虚集』一面(『漱石私論』昭和四六・六 角川書店)は、凱旋での「玄境」と寂光院での「化銀杏」の体験が「一筋の糸」で結ばれ、とくに「木は生と死の境界」にあり、「父母未生以前」に通じていると指摘する。これに対し、駒尺喜美「漱石における厭戦文学―『趣味の遺伝』―」(『日本文学』昭和四七・六)が非現実的な読み取りとして真つ向から否定している。プロットの観点から考察する限り、越智が指摘する「玄境」を始点にして伸ばされた「一筋の糸」は「二」の前半で「余」の戦場の想像を織り上げてはいるが、それはより分析的に見れば「二」の後半の寂光院での出来事と明確な対照性をもって描きこまれているといえるだろう。

(11) 一月二四日付の高浜虚子宛書簡に「帝国文学は十五日迄に草稿が入用のよし」とあり、締め切りが差し迫っていたが、「腹案」が複数あり、またそのための「趣向」がまともらず苦心していた様子が窺える。そして二月一日付の虚子宛書簡には「趣味の遺伝」を書き上げたこと記されている。

(12) 原田敬一「慰霊の政治学」(小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』平成二二・一 紀伊国屋書店)参照。

#### 参考文献

日本におけるコント受容については、注(1)の宮水論に多くを学び、取り上げられている諸文献を参考にさせていただいた。またコントの思想については、以下を参照した。

清水幾太郎責任編集『世界の名著三六 コント・スペンサー』(昭和四五・二 中央公論社)、清水幾太郎『オーギュスト・コント―社会学とは何か』(昭和四八・九 岩波新書)、伊藤邦武責任編集『哲学の歴史・第八巻 社会の哲学(18―20世紀)』(平成一九・一一 中央公論新社)、伊達聖伸「死者をいかに生かし続けるか―オーギュスト・コントにおける死者崇拜の構造」(『死生学研究』平成二〇・九)、コント・コレクション／杉本隆司訳『ソシオロジ―の起源へ』(平成二五・三 白水社)、同『科学Ⅱ宗教という地平』(平成二五・九 白水社)

\*漱石の引用について初出があるものはこれを底本とし、明らかな誤字等を修正した。その他については『漱石全集』(平成五〇・一一 岩波書店)を底本とした。また、適宜句読点を補っている。

(本研究は、JSPS科研費25580057の助成を受けたものの一部である。)